

“東日本大震災からの復興のための実践活動及び研究” 成果報告書

1. 実践活動・研究の名称

被災者の生活再建格差によりそった関係性維持のためのボランティア実践活動

2. 実践活動・研究の成果

(1) グループ代表者

①氏名：城 仁士（会員番号 873560）

②所属・職名：神戸大学大学院人間発達環境学研究科・教授
神戸大学キャリアセンター長（併任）
平成 28 年 3 月に退職し、現在神戸大学名誉教授

③構成メンバー（ 2 ）人

氏名：林 大造

所属・職名：神戸大学キャリアセンターボランティア支援部門・学術研究員

氏名：植村弘也

所属・職名：神戸大学学務部・キャリア支援課長

(2) 実践活動・研究の成果

目的

阪神・淡路大震災の被災地に立地する大学として、「ボランティア元年」とも称される19年前の震災の学びを継承することをひとつの目的とした「学生ボランティア支援室」が本学キャリアセンター内に設立された。本支援室は東日本大震災以前より、神戸の地に集積した多様なボランティア団体とのネットワーク、学生・教職員とのボランティア活動のハブとして機能してきた。神戸からの東日本大震災支援の固有の役割として、「被災地責任」を果たすことが求められている。東北からは遠隔地であるがゆえに、大規模・多頻度の支援はできないが、被災地責任という視点から、①震災の経験を発信・共有すること、②復興の進展とともに支援のはざまから取りこぼされる復興格差に寄り添い続けること、③復興格差の中で拡散・消失していく人間関係性の維持・再構築に留意し続けること、の三点に焦点を合わせてきた。

これまで47回の派遣を通して、延べ1,136名の学生が岩手県沿岸部を中心としてボランティア活動に従事してきた。これまでの中心的活動として、被災者の生活支援・見守りなどの心のケアに関する活動を、足湯ボランティア活動や手芸作成などをツールとして実施してきた。同時にこれを基本としつつ、まちづくりワークショップ

プ、学習支援、被災体験聞き取り文集の発行を行ってきた。

本実践活動では、これまで構築した集合的關係性を維持しつつ、復興住宅・戸建て再建への移行、仮設住宅・みなし仮設への残留などの生活再建格差の進展に留意し、居住分散状況下での關係性再構築を図るための活動に焦点を当てた。派遣形態は小規模多頻度型に軸足を移し、さらに本実践活動を神戸地域などに情報発信し、情報共有することで被災地間の關係性構築も図るものである。また本実践活動では、この学生ボランティア活動を詳細に分析することで、今後の大規模災害における学生ボランティア活動の復興段階に応じた役割とその内容の変遷を追跡し、被災者に寄り添うことの意味や心のケアの内実を整理することによって今後の災害復興の一助とすることを目的とする。

成果

・ (A) 仮設住宅から復興住宅へと至るフェーズでの關係性再構築

- ① 支援対象者・地域：本プロジェクトの1年目支援対象仮設住宅（岩手県山田町・大槌町・釜石市・大船渡市・陸前高田市）とその近傍復興住宅。
- ② 活動内容：足湯・手芸活動によるお茶会活動を基本としながら、そこでの訪問者がかげがえのない「被災地との絆」と捉え、やがては解消する仮設住宅の「仮設住宅同窓会」を数年後に開催することを見据えた、「同窓会」活動としてお茶会活動を展開した。そのことで寄せ集められ、またちりぢりになる仮設住民の、「仮ではあっても現実のコミュニティー」としての仮設住宅の捉え返しを促し、住民間の關係性、住民＝ボランティア間の關係性意識化を図った。
- ③ 目標：転居後も続く關係性の構築による、長期拡大化・内閉化する生活復興格差への寄り添い。

活動実績

・ 2015. 9. 1-7	学生 9 教員 1	陸船気
・ 2015. 9. 17-24	学生 15 教員 1	山大釜
・ 2015. 10. 8-13	学生 6	陸
・ 2015. 12. 19-26	学生 15 卒業生 1 教員 1	大釜山
・ 2016. 1. 7-13	学生 12 (陸高班)	陸
・ 2016. 3. 9-16	学生 19 卒業生 2 教員 1	山大釜
・ 2016. 3. 17-22	学生 13 卒業生 2	陸
・ 2016. 5. 2-8	学生 7 教員 1	山大釜

* 活動場所の略：陸＝陸前高田市、船＝大船渡市、気＝気仙沼市、山＝山田、大＝大槌町、釜＝釜石市

- 地元社会福祉協議会との問題共有の場の設定： 岩手県山田町社会福祉協議会と当プロジェクトの意見交換会を 2016 年 5 月 3 日に実施： 仮設住宅から復興住宅への転出が始まるなかで、ボランティアがほとんど訪れることのない小規模仮設を重点的に訪問することの意義について、社会福祉協議会と意見交換し、むしろ積極的にその方向性で継続的に支援することを合意した。また、復興住宅において自治会の形成などが困難な住宅もあり、そこに当プロジェクトが社協とイベ

ント実施などで協働していくことを道筋として描いた。

(B) 「東北＝神戸」被災地間交流と発信

- ① 支援対象者・地域：本プロジェクトの活動内容を、神戸地域で発信する。発信対象は、本プロジェクトへの学校募金を実施した学校・地域など。
- ② 活動内容：(A)の活動を防災週間、阪神淡路大震災メモリアルデー（1月17日前後）などに報告会を行った。

活動実績

- ・ 2015年10月31日 神戸大学ホームカミングデーにおけるパネル展示の実施
- ・ 2016年1月15日 兵庫県芦屋市立精道中学校「1.17のつどい」の実施：中学生90人にボランティアバス参加学生が活動報告を実施した。「たまたま出会うことでしか個人的な関係にならない」というエピソードについて、感想報告で指摘する生徒が多数いた。
- ・ 2016年1月18日 「今考える防災と行動」（国土交通省 近畿地方整備局／気象庁 大阪管区气象台／一般社団法人 近畿建設協会主催）において報告を実施。
- ・ 2016年1月26日「大学ボランティアセンター等の情報交換会」（大学コンソーシアムひょうご神戸主催）における活動報告の実施：(A)の活動を通じて、以下のような学生のふり返りがあることを報告し、活動の質的水準を持続させるための課題について意見交換した。

- ・ 「復興」ってどんな状態のことなのか。そこでのボランティアの役割ってなに。
- ・ こちらの活動ペースを凌駕するペースで、被災地の状況が激変している。被災地のどういったポイントに焦点を合わせて活動していけば良いのか。
- ・ 仮設住宅の集会所に現れる人にだけ会うということの意味はなんなのか。
- ・ 復興住宅に移っていった人々にフォーカスすることと、仮設にフォーカスすることのどっちが大事なのか。
- ・ 仮設にフォーカスすると、どんどん人が減ってくる。活動していても来訪者が少なくなってくる。なんだかこれでいいのかと自信がなくなる。
- ・ 「来てくれるだけでいい」と言われるが、それで満足していいのか。
- ・ 「コミュニティー支援」という言葉の薄っぺらさ。マクロな視点で現地を見たくない。僕がやりたいことはミクロ。
- ・ 東日本大震災の被災地だけがボランティアの必要とされているところではないはずだ。自分たちの活動は、そうした普遍性のなかでどう差異化できるのか。
- ・ なるべく多くの仮設住宅をまわって活動したい。しかし時間・資金の問題から、自分たちの行きたい活動先に絞らざるをえない。

(C) 仮設同窓会、「地域文化を学ぶ集い」等による関係性形成の土台作り

- ① 支援対象者・地域： 釜石市既支援仮設住宅自治会長、大槌町伝統文化関係者と

の連携

- ② 実施方法：すでにプロジェクト1年目に実施した上記2形態のイベントを、「住民の移転と仮設住宅の今」、「土地区画整理のなかでの祭り」などのテーマで継続発展させる。
- ③ 実施方法：実施にあたっては1年目の成果もあわせて媒体発信する。学生自身が活動のなかで感じた疑問を、企画会議であらかじめ協力者に投げかける。
- ④ 目標：支援そのものの背景・文脈を知る。

活動実績

- ・ 2015年9月21日 岩手県大槌祭りへの白澤鹿子踊保存会としての参加：伝統芸能である鹿子踊りの踊り手として、地域住民とともに祭りに参加することで、地域の伝統芸能がコミュニティーに果たす役割を学生が知ることとなった。また、土地区画整理の中で祭りの巡航ルートが変更になるなど、特殊な状況であるがゆえに、学生が参加することの意味を深く感じさせる場となった。
- ・ 2016年3月10・11日 岩手県釜石市中妻公民館において、「追悼の会」を実施：やがては解消する仮設住宅の「仮設住宅同窓会」として、「追悼の会」を実施することで、寄せ集められ、またちりぢりになる仮設住民の、「仮ではあっても現実のコミュニティー」としての仮設住宅の捉え返しを促し、住民間の関係性、住民＝ボランティア間の関係性意識化を図ることができた。具体的には、仮設住宅住民が、復興住宅内の公民館を訪問することで、復興住宅住民が、転出元の仮設住宅の思い出を語り合う場となった。
- ・ 2016年3月13日 岩手県釜石市鶴住居地区まちづくり協議会との協働事業の実施：同協議会と、まちづくりワークショップを継続的に実施していくための会議を開催した。具体的には、地域の祭りの前後に震災前の地域の模型に住民の震災前の記憶を重ねていくワークショップを実施し、記憶の次世代への継承を計ることで合意した。これに重ね合わせるかたちで、小・中学生への学習支援プログラム展開することとなり、その第1回目を同日実施した。
- ・ 2016年5月3日 白澤鹿子踊保存会との伝統文化を知る交流会に参加：祭りの準備に賭ける地域住民の意気込みを、平常時の交流会において、むしろ生々しく感じる結果となった。また、当該地区に1ターンした新規転入住民とも交流を深めることで、復興の多様な担い手の可能性を感じさせる場となった。

“東日本大震災からの復興のための実践活動及び研究” 会計報告書

活動・研究名称	被災者の生活再建格差によりそった関係性維持のためのボランティア実践活動	
代表者 氏名・所属	神戸大学大学院人間発達環境学研究科・ 教授 神戸大学キャリアセンター長（併任）	城 仁士

1. 助成額	¥850,000
2. 支出合計	¥850,000
(1) 機器・備品	¥0
(2) 消耗品	¥243,168
1) 液晶ディスプレイ	¥24,800
2) ゼムグリップ	¥7
3) ノート	¥51,000
4) クリアーブック	¥22,300
5) 輪転機インクノマスター	¥125,883
6) ラミネートテープ	¥19,178
(3) 旅費・交通費	¥467,789
1) 林大造（神戸-大槌）3往復	¥215,140
2) 森恭子（神戸-大槌）2往復	¥123,349
3) 梅本匠（神戸-陸前高田）1往復	¥25,860
4) 南響（神戸-陸前高田）1往復	¥25,860
5) 横田美空（神戸-陸前高田）1往復	¥25,860
6) 喜多茜音（神戸-陸前高田）1往復	¥25,860
7) 三好貴子（神戸-陸前高田）1往復	¥25,860
(4) 謝金	¥0
(5) その他	¥139,043
1) プリンタヘッド交換	¥14,040
2) 輪転機修理	¥19,440
3) ガソリン代	¥11,280
4) レンタカー借料	¥83,446
5) 高速道路通行料	¥10,837

※ 領収書は各費目ごとにA4用紙に貼付し、通し番号を付けてください。